



高校生が考えるグローバル人材に必要な能力と その構造

木野 泰伸*¹

Skills for Global Human Resources and Structure Recognized by High School Students

Yasunobu KINO*¹

Abstract– Global human resources development is becoming more and more important because of current emerging global business environment year by year. This research discusses the skill set, which is requested by current high school students to be a person who will succeed in global environment in the future. Comments are collected by the survey on the Internet from Japanese high school students in 2015. The question analyzed in this research is “What kind of skills are needed to be a person who will execute global activities in the future? What kind of education is necessary to attain these skills?”

1740 answers are analyzed using text quantitative analysis methods. We checked frequently used keywords and their relationships to understand the structure of students’ opinions. Additionally, we manually checked important phrases described in the answers. Then, we developed the structured 6 categories of skill set, which will help educating high school students to acquire global capabilities. On this scheme, students will also be able to measure their own global skill levels by themselves.

Keywords– High school education, Human resource development, Global business, Text mining

1. はじめに

近年、多くの企業は国境を超え、調達、製造、販売などの経済活動を行っている。今後も、世界全体を視野に入れ、活動の最適化を図る企業が増加すると予想される。

このようなことを背景に、グローバル環境で活躍できる人材の育成が急務になっている。

文部科学省では、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを育成するため、グローバルな社会課題を発見・解決できる人材や、様々な国際舞台で活躍できる人材の育成に関する教育課程等の研究開発を行う高等学校及び中高一貫教育校を「スーパーグローバルハイスクール」に指定し、国内外の大学や企業、国際機関等との連携による質の高い教育課程等の開発・実践やその体制整備を支援している [1]。

グローバル人材育成についての議論の多くは、育成する側の立場から高校生や大学生が将来グローバル人材になるために必要と思われる知識や能力について議論して

いる。

本研究では、育成される側、すなわち高校生や大学生自身が、将来グローバル人材として活躍するためには、どのような教育を受けたいかという視点で検討した。具体的には、高校生にアンケートを行い、そこに記載されている自由記述の内容を分析した。そして、その結果をもとに、将来、グローバル人材になるためには、どのような知識や能力の育成を支援することが良いかについて検討した。

2. 関連研究

グローバルリーダーシップおよびグローバル人材の育成に関しては、既に多くの研究がなされている。グローバルリーダーシップの研究に関する代表的なものとして、ハウスらが 1990 年代後半から行った GLOBE (Global Leadership and Organizational Behavior Effectiveness) がある [2]。ハウスらは、各国の研究者との国際共同研究により、世界 60 ヶ国以上のグローバルマネジャーを対象として、リーダーシップ行動を規定する要因を探索した。その結果、グローバル・リーダーの判断や行動に影

*1 筑波大学 ビジネスサイエンス系

*1 University of Tsukuba, Department of Business Sciences

Received: 15 February 2016, Revised: 15 March 2016, Accepted: 24 June 2016.

響を与える9項目の文化的次元(説得力, 未来指向, 性役割分化, 不確実性の回避, 権力の格差, 個人主義/集団主義, 集団内集団主義, 達成志向, 人間関係性)を明らかにした [2][3].

また, 筑波大学グローバル人材開発リサーチユニットでは, グローバル環境で活躍するビジネスパーソンを対象に, 実際のビジネスの現場で, どのような危機的な体験をしているか, また, その事象を解決するのに役立つコンピテンシーについて, 2010年に11カ国でパイロット・インタビュー調査を実施し, その結果を踏まえ, 2011年と2012年に分けて, 合計12ヶ国でアンケート調査を行い, グローバル・リーダーシップ・コンピテンシーの学習メカニズムについての探索的研究を行っている [3][4]. これらの調査は, いずれも, ビジネスパーソンを対象としている.

本稿では, 今後, グローバル環境で活躍するであろう高校生を対象にアンケートを実施し, 将来, グローバルで活躍する人材になるために受けた教育を, 育成する側の視点ではなく, 育成される, もしくは自ら成長していく高校生自身の視点から検討する.

3. アンケート調査

3.1 調査の概要

アンケート調査は, 平成26年度スーパーグローバルハイスクール指定校およびアソシエイト校を対象に, 各校20名を基準として実施した. 筑波大学のサーバー上にWebアンケート調査サイトを開設し, 回答者である各高校生が, 事前配布の回答者向けIDとパスワードを用いて, Webアンケート調査サイトに入る形式にした. アンケート調査の初期画面では, 個人情報は保護され, 回答結果は, 個人名, 学校名が公表されないことを明示し, 個人情報の保護を厳守した.

回答期間は, 2015年4月24日(金)から5月16日(土)で, 全国73校の1911名から有効回答を得た. 有効回答者の性別は, 男性40.2%, 女性59.8%, 学年は, 1年生42.5%, 2年生38.2%, 3年生19.3%であった.

3.2 自由記入コメントのクリーニング

今回, 分析に利用したのは, アンケートの最後にある自由記入欄で, 質問文は, 「将来, グローバルに活躍するために, どのような能力が必要だと思いますか? また, その能力を獲得するためにはどのような教育を受けたいと思いますか?」というものである. なお, アンケートの質問項目全体については, 「SGHグローバルリーダーシップ調査報告書」を参照されたい [5].

自由記入欄のコメント数は, 1756件であった. それをもとに, テキスト計量分析をするためのクリーニングを

実施した. クリーニングでは, 明らかな誤字の修正, 句読点の修正及び追加, 英語やローマ字で記入されていたコメントを日本語に翻訳もしくは変換, コンピュータの機種依存文字の修正を行った. また, 「はい」など, 質問に対して意味のないコメントを分析対象から除外した. その結果, 分析用のコメントは1740件になった. 以下に, コメントのサンプルを示す.

- 英語を聞き取ったり話したりする能力.
- 最低限, 自分の国について説明できるようにし, 相手の国の文化の違いをしっかりと理解することです.
- 国際問題に関するプレゼンテーションを作り発表したりする授業があればいいと思います.
- お互いの価値観を認め合うことと積極的にコミュニケーションをとっていく能力が必要だと思う.
- 自国で起きている問題を発見し, それが現在どのようなアプローチで解決に向かっているのか, またはそうでないのかを分析し, 提案できることが一番大切であると思う.

3.3 分析手順

分析対象とした1740件のコメントを入力データとして, テキスト計量分析を実施した. 分析には, KH Coder [6]のVersion 2.00eを利用した. 分析の手順はFig. 1のとおりである.

はじめに, 前述したとおり, (1)データのクリーニングを実施し, 1740件を分析用の入力データとした. 次に, (2)KH Coderを用いて, テキスト計量分析を行っ

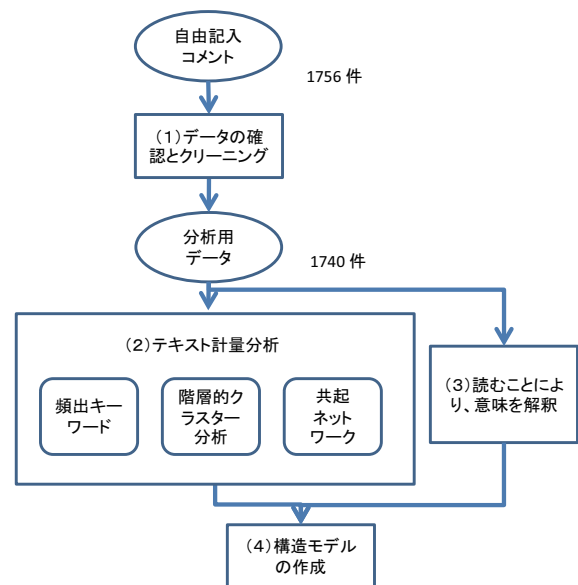


Fig. 1: 分析手順

た。本稿では、頻出キーワード、階層的クラスター分析、共起ネットワークについて確認する。なお、実際の分析では、試行錯誤しながら実施している。また、テキスト計量分析と並行して、(3)全文を読むことにより、意味の解釈と全体の傾向を確認した。そして、(2)(3)の結果をふまえ、育成方法を検討するときに利用できる(4)構造モデルの検討を行った。以下ではそれらを順に紹介する。

3.4 テキスト計量分析

テキスト計量分析では、頻出キーワード、階層的クラスター分析、共起ネットワークを作成した。その内容を以下に述べる。

3.4.1 頻出キーワード

キーワードを抽出するためには、日本語の形態素解析を行う必要がある。今回は、奈良先端科学技術大学院大学で開発された茶筌 [7] を KH Coder を通して利用した。KH Coder では、「名詞」「サ変名詞」「形容動詞」「動詞」「形容詞」「副詞」「感動詞」など、品詞別に、頻出キーワードを集計できる。

はじめに、各品詞に含まれている語を確認した。その結果、分析に有用と思われるキーワードは、「名詞」「サ変名詞」「動詞」に含まれていることが分かった。Table 1 では、重要と思われるキーワードが含まれている「名詞」「サ変名詞」「動詞」について、上位 30 件を記載した。なお、「サ変名詞」とは、名詞に「する」が接続してサ行変格活用の動詞となりうる名詞のことである。例として、理解(する)、会話(する)などがある。

キーワードを品詞別に見てゆくと、名詞では、「能力」「英語」が 1000 回以上登場している。このことから、英語が特に注目されていることが分かる。それ以外に、「コミュニケーション」や「プレゼンテーション」といった情報の伝達に関するキーワード、「文化」「歴史」といった、集団のコンテキストに関するキーワードが登場する。また、「考え」「考え方」といった思考に関するキーワードが登場する。

サ変名詞では、全体的に件数が多いものの、「授業」「交流」「留学」「生活」といった学習の方法や場所を示すキーワードが登場している。

動詞には、「考える」「知る」「学ぶ」など学習に関連するキーワード、「話す」「話せる」「伝える」「聞く」などのコミュニケーションに関するキーワード、「触れる」「関わる」「見る」など、交流の体験を伴うキーワードが登場する。それ以外の特徴的なものに、「受け入れる」というキーワードが 79 回登場している。

なお、キーワードの抽出において、複合語についての特別な対応をしていないため、重要かつ多くの複合語が

Table 1: 頻出キーワード

名詞	サ変名詞	動詞			
能力	1470	教育	686	思う	1948
英語	1236	意見	432	受ける	360
コミュニケーション	795	授業	426	考える	343
自分	793	理解	345	話す	286
外国	536	活躍	195	持つ	257
文化	500	交流	193	知る	254
相手	323	会話	146	学ぶ	241
積極	322	獲得	126	伝える	234
言語	272	解決	95	話せる	206
機会	266	勉強	86	行く	95
世界	247	学習	84	増やす	94
海外	222	尊重	81	使う	92
考え	168	発表	78	聞く	88
自国	147	表現	77	言う	83
知識	143	留学	63	行う	79
グローバル	137	発言	60	受け入れる	79
語学	137	経験	59	違う	71
学校	135	行動	58	触れる	70
他国	113	活動	57	見る	63
社会	87	説明	57	設ける	60
日本人	86	議論	56	関わる	59
歴史	83	話	56	出来る	59
価値	82	発信	55	得る	55
物事	82	対応	51	使える	54
言葉	80	生活	48	向ける	52
考え方	76	ディスカッション	45	高める	50
国際	74	意思	43	感じる	49
プレゼンテーション	72	思考	40	取り入れる	47
環境	72	共通	37	着ける	46
英会話	69	意味	34	作る	45

存在すると思われるキーワードについて、どのような複合語が使われていたかを確認した。

- 「能力」については、コミュニケーション能力(420回)、言語能力(30回)、プレゼンテーション能力(24回)、英語能力(21回)、問題解決能力(14回)などに使われていた。
- 「教育」については、英語教育(38回)、外国語教育(5回)、学校教育(5回)などであった。
- 「問題」については、問題解決(18回)、問題解決能力(14回)、国際問題(10回)、問題点(6回)、社会問題(5回)などであった。
- 「文化」については、異文化(84回)、異文化理解(12回)、多文化(12回)などであった。
- 「理解」については、異文化理解(12回)、理解力(11回)、異文化理解能力(3回)、他者理解(3回)などであった。

3.4.2 階層的クラスター分析

自由記入欄には、高校生の視点から多様な内容が記述されている。その内容を整理するために、キーワード出現の特徴を利用して、いくつかのグループに分類することを試みた。具体的には、Table 1 に登場する上位 30 件の名詞を用いて、階層的クラスター分析を実施した。クラスター分析は、対象間の関連性を表すデータを分析す

る手法の一つで、分析データのパターンが似ている個体を同じグループ（クラスター）にまとめる分析手法である [8]。これにより、出現パターンの似通ったキーワードをグループ化することができる。階層的クラスターを作成する方法として Ward 法、距離には Jaccard を用いた。Ward 法は、クラスター内の各個体データから、クラスターの重心までの距離に注目し、その距離の平方和ができるだけ増えないように次に融合するクラスターを探してゆく [9] 方法である。

分析結果を Fig. 2 に示す。なお、Fig. 2 ではクラスター数を 7 で色分けしている。また、図下部の縦棒は、それぞれ、出現数を相対的に示している。

7つのグループは、以下のとおりである。

ア。「英語」「能力」「コミュニケーション」という用語のグループ。

本グループのキーワードは、それぞれ出現回数が多いという特徴がある。また、自由記入コメントの例として、「グローバルに活躍するためには、コミュニケーション能力と英語の能力が必要だと思う。」といったものがある。なお、この3つのキーワードが含まれているコメント数は 229 件であった。

イ。「積極」「海外」「言語」「機会」「外国」「文化」といった用語のグループ。

本グループのキーワードが使われているコメント例として、「そのため教育では積極的に海外に行く機会を与えるか、もしくは多文化の人を招いてコミュニケーションをとるようなことが必要だと思います。」といったものがある。

ウ。「自国」「他国」「歴史」「世界」「知識」という用語のグループ。

本グループのキーワードが含まれているコメント例として、「自国の文化や歴史、魅力について語ることができなければ外国人と交流する際に情けない人物として見られてしまいますし、何よりも他国の文化について言及することさえ十分にできないと考えます。母国の知識を獲得するには、世界で起きている出来事、もしくは過去に起きた出来事と、母国で起こった出来事を比較し、他者と議論を行うことが効果的と思われます。」といったものがある。

エ。「グローバル」「社会」「国際」「問題」といった用語のグループ。

本グループのキーワードが含まれているコメント例として、「冷静に考えることができ、他人の話を理解しようと試みる能力。関心を持つこと。それがあれば、偏見が少なくなったり、国際問題に限らず社会問題にも目を向けることができると思う。」といったものがある。なお、本自由記入コメントには、「グローバル」は、含まれていない。

オ。「語学」「言葉」「プレゼンテーション」「環境」「学校」「日本人」という用語のグループ。

「語学」「言葉」というキーワードが含まれているコメントは 9 件存在したが、「プレゼンテーション」「環境」「学校」「日本人」というキーワードが一緒に含まれているコメントは、1 件のみであった。そのため、本グループは、クラスター分析の結果に登場するものの、他のキーワード群に比べて意味的な重要性は低いと思われる。

カ。「考え」「自分」「相手」という用語のグループ。

本グループは、図下部の縦棒グラフからもわかるように、件数も多いことから、多くの回答者が述べている。このようなキーワードが含まれている例として、「グローバルに活躍するためには、まず、自分の思いを伝え、相手の考えを知ることが大切だと思います。」がある。

キ。「物事」「価値」「考え方」という用語のグループ。

3つのキーワードをすべて含んでいるコメントは、1 件のみであるが、「価値」「考え方」を含んでいるコメントは、11 件存在する。例として、「自分とはまったく違う価値観や考え方を持っている人のことや、他国の文化や歴史を理解する能力が必要だと思う。」がある。

以上、クラスター分析を用いることによって、名詞として出てくるキーワードを 7つのグループに分けて確認した。

3.4.3 共起ネットワーク

次に、「名詞」「サ変名詞」「動詞」の 3 品詞を用いて、共起ネットワークを作成した。共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語を線で結んだネットワーク図で描くものである。KH Coder では、語と語のネットワークを描く際に、T. Fruchterman and E. Reingold [10] の方法が用いられている。

集計単位には、「段落」を用いた。今回の入力データでは、1 名ずつの回答がそれぞれ 1 段落となっているため、段落単位というのは、回答者単位ということになる。分析の結果を Fig. 3 に示す。

ネットワーク図を見やすくするために、意味のあるグループを点線で囲い、5つのグループに区分した。グループを作成するにあたっては、「サブグラフ検出 (random walks)」の出力結果を参考にした。各グループの特徴は、以下のとおりである。

a. 「英語」「コミュニケーション」「能力」を中心として、「授業」「教育」などが結びついているグループ。

これは、前述の「名詞」のみを利用した階層的クラスター分析における、アに対応している。

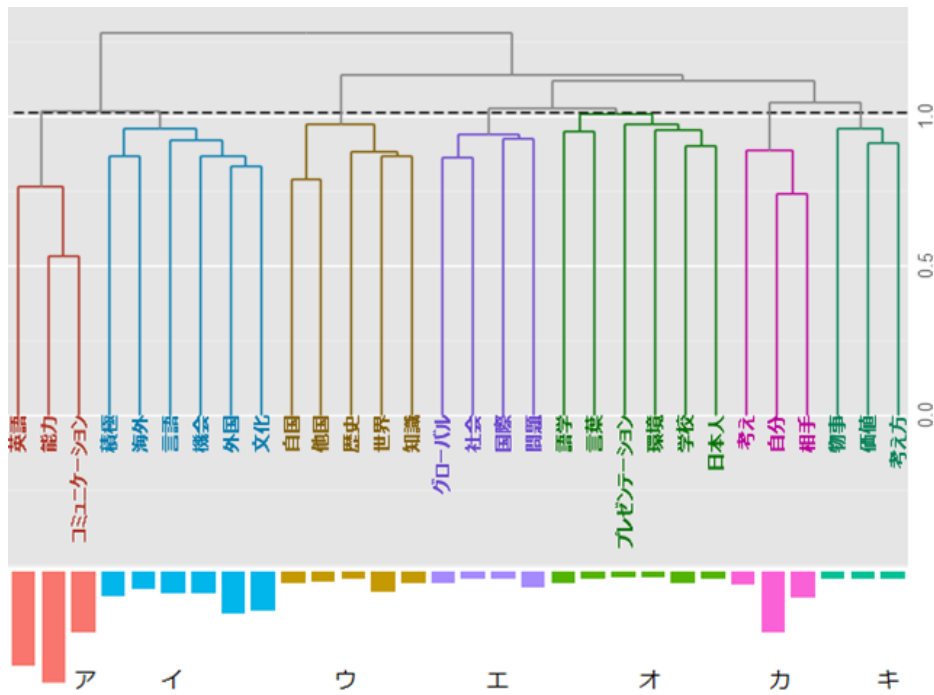


Fig. 2: 名詞を用いたクラスター分析

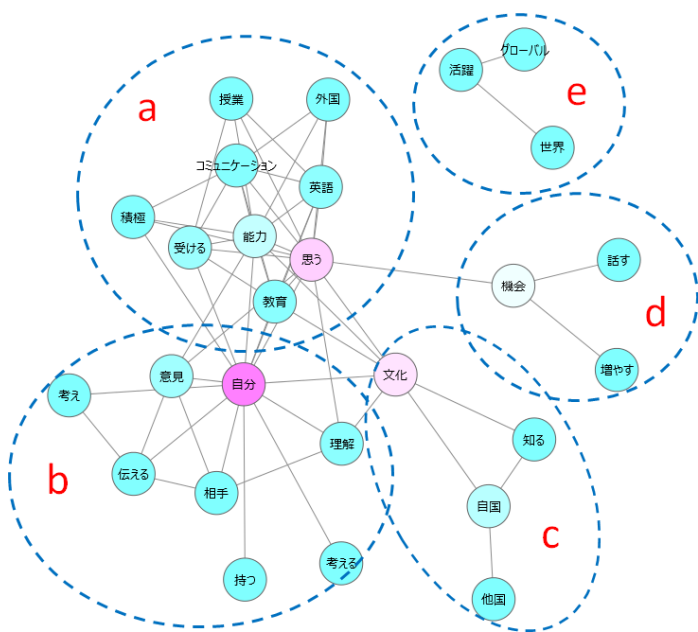


Fig. 3: 共起ネットワーク

b. 「自分」を中心に、「意見」「伝える」「考える」「持つ」「相手」といった、自分の意見を考え、相手に伝えるという能力を表現しているグループ。

これは、階層的クラスター分析における、カおよびキに対応する。

c. 「自国」「他国」「知る」「文化」が結びついているグループ。

これは、階層的クラスター分析における、ウに対応した内容であると思われる。なお、「文化」については、他のキーワードとの結び付きも強く、aおよびbとの関連が見られる。また、階層的クラスター分析において、「文化」はイに含まれている。

d. 「機会」「話す」「増やす」が結びついているグループ。

これらのキーワードが用いられているコメントには、「外国の人と話すコミュニケーション能力が必要だと思う。そのために、外国の方を招いたりしてコミュニケーションをとる機会を増やすといいと思う。」などがあり、話したり、コミュニケーションする機会を増やしてほしいというものである。これは、イに相当する内容である。

e. 「活躍」が「グローバル」「世界」と結びついているグループ。

このキーワードが用いられているコメントを確認すると、「グローバルで活躍するためには、」や「世界で活躍するためには、」など、文頭に出てくることが多く、解答をするための前置きになっていることが多い。その意味では、回答の前提として質問を復唱している部分であり、回答そのものではない。

本グループは、クラスター分析のエと似ていると考えることもできるが、上記理由により、エとは異なるものとして考えている。

以上、「名詞」「サ変名詞」「動詞」から共起ネットワー

クを作成することにより、コメントに登場するキーワードを5つのグループに分類した。

3.4.4 読むことによる意味的解釈

以上の計量的分析では、頻度の多いものが優先的に使われる傾向にあるため、全コメントを読むことにより、少数ではあるが、重要と思われる意見を抽出した。重要と思われるコメント群には、以下のようなものがあった。

- 相手の考えや価値観を受け入れようとするに関するコメント。

例として、「いろいろな価値観を持った人を柔軟に受け入れる能力が必要。」「いろいろな人の意見や考えを積極的に受け入れ、良いところも悪いところも正確に見極める能力。」など、相手の考えや文化、そして多様性を受け入れる能力が重要であると述べているコメントが多くあった。Table 1を確認すると、動詞の欄に、「受け入れる」というキーワードが79回登場する。

- リーダーシップが重要であると述べているコメント。

将来グローバルで活躍するために、リーダーシップが必ずしも必要であるかどうかについては、議論が分かれる部分であると思われるが、今回のアンケートでは、分析対象としたコメントの1.7%で語られていた。

以上、クラスター分析、共起ネットワーク、そして、読むことによる意味的解釈をもとに、自由コメントに記述されている内容を、Table 2のように10の区分に整理した。

4. モデルの作成

テキスト計量分析において、高校生が、将来、グローバル人材になるために身に着けたいと考えている能力を、階層的クラスター分析では7グループ、共起ネットワークにおいては5グループに分類した。ただしそれらは、分析時におけるパラメーターの設定、分析手法、そして、アンケート対象者の属性によって変化する可能性がある。そこで、上記分析に加え、自由記入コメントに出てくる人物を指すキーワードに着目し、現実社会における構造的枠組みを検討し、分類の安定化を図った。

Table 1の頻出キーワードから、登場人物を確認すると、個人としての「自分」「相手」、人が集まった組織に関連するキーワードとして、「外国」「自国」「他国」「日本人」などが登場する。

このことから、回答者の多くは、個人レベルとして、自分と相手という2者間の構造をイメージしていると

Table 2: クラスター分析と共起ネットワークにおける各グループの関係

番号	クラスター分析 (7分類)	共起ネットワーク (5分類)	備考 および 読むことによる意味的解釈 (9と10)
1	ア.「英語」「能力」「コミュニケーション」	a.「英語」「コミュニケーション」「能力」「授業」「教育」	英語、コミュニケーション。記述回数が多い。
2	イ.「積極」「海外」「言語」「機会」「外国」「文化」	d.「機会」「話す」「増やす」	教育機会の頻度や量のことを述べている。能力もしくは受けたい教育そのものではない。
3	ウ.「自国」「他国」「歴史」「世界」「知識」	c.「自国」「他国」「知る」「文化」	歴史、文化など、集団としてのコンテキスト。自分側と相手側の両方。
4	エ.「グローバル」「社会」「国際」「問題」		社会問題、国際問題など、俯瞰的な問題を意識している。
5	オ.「語学」「言葉」「プレゼンテーション」「環境」「学校」「日本人」		件数は少なく、他のグループに比べ重要性は低い。
6	カ.「考え」「自分」「相手」		自分の意見を考え、相手に伝えるという能力を表現している。
7	キ.「物事」「価値」「考え方」	b.「自分」「意見」「伝える」「考える」「持つ」「相手」	例として、「自分とはまったく違う価値観や考え方を持っている人のことや、他国の文化や歴史を理解する能力が必要だと思う。」がある。
8		e.「活躍」「グローバル」「世界」	質問を復唱。
9			「受け入れる」に関する記述。(3.4.4 読むことによる意味的解釈により抽出)
10			「リーダーシップ」に関する記述。コメント総数の1.7%で言及。(3.4.4 読むことによる意味的解釈により抽出)

考えられる。現実のグローバル環境においては、2者だけでなく、3者以上の関係になる場合も多いが、今回は、最もシンプルな構造である2者を前提として検討した。

また、「外国」「自国」「他国」「日本人」といったキーワードが登場することから、最小単位である個人とは別に、個人が複数集まった組織としての形態を認識していることがわかる。このことから、自分という個人、自分が所属する集団、相手という個人、相手が所属する集団がコメントの中に登場しているといえる。この登場人物の関係を基礎として、モデル化したのが、Fig. 4である。

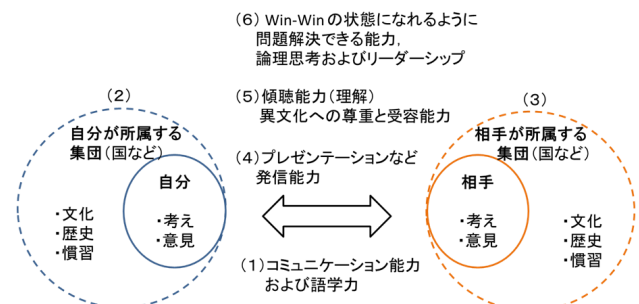


Fig. 4: 高校生が考える必要能力の概念図

左側の小さな実線の円は、自分という個人であり、一人ひとりの高校生を指す。その自分という個人を囲む、大きな点線の円は、個人が集まって形成される組織であり、今回のケースでは、多くの場合において日本という国を指し、その日本が持つ文化、歴史、慣習などが言及されている。次に、右側の小さな実線の円は、相手個人を指しており、大きな点線の円は、その相手が所属している集団であり、国家や民族が意識されている。この左側と右側は、対称構造となっている。これを基礎として、Table 2 で分類した、高校生が必要と考えている能力を再検討すると、以下のように整理できる。

- (1) コミュニケーションを行う能力。そのための語学力。
これは Table 2 の 1 に対応し、多くのコメントで語られていた内容である。
- (2) 自分の考えを知り、意見を持つ能力。自分が所属する集団としての文化、歴史、慣習を知り、理解する能力。
個人としての考えの部分は、Table 2 の 6、集団としての文化、歴史、慣習の部分は Table 2 の 3 に対応。
- (3) 相手の考えを知り、意見を理解する能力。相手が所属する集団としての文化、歴史、慣習を知り、理解する能力。
相手個人としての考えの部分は、Table 2 の 7、相手集団としての文化、歴史、慣習の部分は Table 2 の 3 に対応。
- (4) 自分側の考えや文化等を、効果的に伝えることのできる能力。プレゼンテーション能力など。
Table 2 の 6 に対応。
- (5) 相手側の考えや文化等を、傾聴し、受け入れることのできる能力。異文化への尊重と受容能力。
Table 2 の 7 と 9 に対応。
- (6) 自分および相手を俯瞰し、双方が Win-Win の状態になれるように問題解決できる能力。論理的思考能力やリーダーシップについてもここに含まれる。
Table 2 の 4 と 10 に対応。

以上、自分と相手という登場人物に着目した構造を加え、高校生が考える身につけたい能力を、6つのグループに分類した。これは、Table 2 の各グループを再整理したものになっている。なお、Table 2 の中の 2 は、教育機会の頻度について述べており、能力ではないため、能力を分類した 6つのグループには含めていない。また、5 については、内容的に Fig.4 の (1) や (4) に含まれる複合的な内容となっていることから、分散して 6つのグループに含まれている。8 については、質問を復唱している部分であり、構造を考慮したグループの中には含めていない。

5. おわりに

アンケートにおける自由記入のコメントを分析することにより、高校生が考えている、グローバルで活躍するために必要な能力を、6つのグループに整理した。これらの能力を確認すると、歴史や問題解決といったキーワードが登場する。このことから、グローバルで活躍するために必要な能力を育成するためには、英語だけでなく、日本史や世界史、現代社会、ひいては問題解決のための数学も重要であることがわかる。そこで、日本の歴史を英語でプレゼンテーションする授業や、問題解決を意図した数学の授業なども効果的と考えられる。このように、グローバル教育を独立したものとして扱うのではなく、既存の科目と連携し横断的に実施することが、より望ましいと思われる。

また、今後の展開として、各能力の測定尺度を作成し、客観的評価ができるようになれば、レーダーチャート等を利用して、生徒一人ひとりの能力の現状を可視化することが可能となる。そのことにより、どの部分を重点的に強化していくかということが把握でき、育成の指針にすることができると考えている。

なお、本研究の制限として以下のことが挙げられる。アンケートを実施した対象は、平成 26 年度スーパーグローバルハイスクール指定校およびアソシエイト校であり、学校として、グローバル教育に力を入れている高校である。そのため、日本全体の高校生の傾向とは言えない。また、高校生は日々成長していく時期にあることから、学年による違いについての分析も必要である。さらに、今回は自由記入欄を分析対象としたが、アンケートにはそれ以外の質問項目もあるため、今回得られた知見とそれら質問項目への回答との関連についても分析していきたい。

なお、2章で言及した GLOBE をはじめとする研究は、社会人を対象とし、コンピテンシーについて議論しているため、本研究における分析と用語や視点が異なっている。例えば、GLOBE における未来指向、不確実性の回避、権力の格差などは、今回の分析では出てこない。その一方で、説得力については、Fig.4 における (4) プレゼンテーションなど、発信能力との関連があるように思われる。高校生が必要と考えている能力と、社会人が考えるコンピテンシーとの間の類似点や相違点についても、引き続き検討を進めていきたいと考えている。

謝辞: 本研究は、平成 27 年に実施された「SGH グローバルリーダーシップ調査」のアンケート結果を基礎としています。アンケートに回答をいただきました高校生、各高校にてご担当いただきました先生、筑波大学附属学校教育局、筑波大学附属高等学校、筑波大学 SGH 調査班の皆様にお礼を申し上げます。

References

- [1] 文部科学省：平成 28 年度「スーパーグローバルハイスクール」に関する研究開発の実施希望について。
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sgh/1365881.htm (参照 2016 年 1 月 13 日)
- [2] R. House, M. Javidan, P. Hanges, P. Dorfman: Understanding cultures and implicate leadership theories across the globe: an introduction to project GLOBE, *Journal of World Business*, 37, pp. 3-10, 2002.
- [3] 永井裕久, キャロライン・ベントン: パフォーマンスを生み出すグローバルリーダーの育成, 白桃書房, 2015.
- [4] キャロライン・ベントン, 永井裕久, 椿広計, 木野泰伸: グローバル・リーダーシップ・コンピテンシーの学習メカニズムに関する探索的研究, *横幹*, Vol. 9, No. 1, 2015.
- [5] 筑波大学附属学校教育局 筑波大学附属高等学校, SGH グローバルリーダーシップ調査報告書, 2015. http://www.sghc.jp/sgh_report/ (参照 2016 年 2 月 10 日)
- [6] 樋口耕一: 社会調査のための計量テキスト分析, ナカニシヤ出版, 2014.
- [7] 茶釜 Wiki, <http://chasen.naist.jp/hiki/ChaSen/> (参照 2016 年 2 月 10 日).
- [8] 松村真宏, 三浦麻子: 人文・社会科学のためのテキストマインニング [改訂新版], 誠信書房, 2014.
- [9] 石川慎一郎, 前田忠彦, 山崎誠編: 言語研究のための統計入門, くろしお出版, 2010.
- [10] T. Fruchterman, E. Reingold: Graph Drawing by Force-directed Placement, *Software - Practice and Experience*, Vol. 21, No. 11, pp. 1129-1164, 1991.

木野 泰伸



1990 年日本アイ・ビー・エム株式会社入社。金融、報道、製造業等のシステム開発プロジェクトに参画。2005 年筑波大学大学院ビジネス科学研究科助教授、現在准教授、博士（システムズ・マネジメント）。
